

昭和二十年八月七日 ソ連参戦により出動

昭和二十年八月十六日 トンキン城にて終戦

昭和二十年八月十八日 吉林歩兵第二連隊にて武

装解除

昭和二十年九月 シベリア・ビイスク收容

所に抑留される

昭和二十二年六月一日 復員 直ちに農業に従事

今日に至る

(栃木県 野沢 芳夫)

抑留記

栃木県 青木 久

一、出生から入隊

① どこで、いつ生まれ、いつ、どこの学校を卒業し、卒業後の生活状況。

亡父が皇宮警察官だったので、東京都荒川区町屋で、大正十三（一九二四）年二月一日生まれ。

その後、栃木県塩谷郡北高根沢村大字平田東高谷に在った日本専売公社高根沢取扱所へ移住。

昭和十三（一九三八）年四月、塩谷郡喜連川町尋常高等小学校高等科二年から、旧制栃木師範学校一部一年生に入学。

昭和十八年四月、本科三年生。当時大東亜戦争は、無謀なる戦域の拡大で兵員不足、八月に学徒動員令が発令され、八つ上がりの同級生殆どに召集令状。学校では止むを得ず、八月二十

五日に繰上げ卒業式。九月から十月にかけて南方、北方へ出征されました。

七つ上がりの私達数人が、九月の二期期から足尾、北那須等、山村僻地の国民学校へ単身赴任。私は塩谷郡三依村（現藤原町）の国民学校に赴任し、高等科一年生を担当。

宿泊所は大字独鈷沢の旅館。学校へは大字五里からの生徒や居住地の児童生徒達と登校しました。

翌十九年四月には、居住地独鈷沢で元村長だった山口豊吉氏の長女、み津江さんが、同じ学校に初赴任。朝は生徒の後から一緒に登校。帰りは二人だけで肩を並べて帰校。いつしか相愛の仲となり、昭和二十六年三月に結婚。

- ② 家業、家族構成など。
単身赴任の為、家業、家族構成などありませんでした。

二、ソ連軍侵攻前

- ① いつ、どこで、どういう形（徴兵、召集等）でどこに入隊したか。

装備（兵器、軍服等）の状況。

昭和十九年十一月二十日、赤紙の召集令状を受け、二十七日栃木県宇都宮市戸祭町にあった東部三六部隊（旧歩兵五九連隊）に入隊。翌日、三種混合の予防接種を受け、一週間後、北支派遣軍陣第四二八六部隊第二五大隊に転属命令。

十九年十二月から二十年五月まで、北支北京の南方、涿県で軍事訓練。軍服は一着用、兵器は三八式歩兵銃（日露戦争以来の）でした。

- ② 特に満州では、戦況の急迫に対応して、根こそぎ動員という形で部隊が編成されたと言われているが、隊員の構成、装備などの状況。

北支涿県で一期検閲後、二十年五月、幹部候補生の試験があり、旧制中学校卒業生は全員受験、受けざるは国賊の時代、私も受験して合格。

北支には学校が無いので六月満州へ移動。二

十年七月一日、牡丹江省石頭にあつた陸軍予備士官学校に、最後となつた第十三期甲種幹部候補生として入校。

学校では一中隊から四中隊までは歩兵中隊、五中隊は戦車隊、六中隊は砲兵隊で、各中隊とも一区隊から八区隊、一区隊八十人くらいでしたから、各中隊六百余人、全校生三千六百人位でした。

装備も一般の軍隊と同じように、整つておりました。

三、ソ連軍侵攻

① 侵攻は、いつ、どこで、どういう状況の中で行われたか。

ソ連の侵攻など予想もしておりませんでした。が、八月十日、全校生集合の命令があり、昨九日、ソ連軍が侵攻の報告がありました。

② その時の部隊の配置、編成と侵攻への対応(対戦した場合は戦闘状況)。

学校では、一〇三奇数中隊と、五〇六中隊の半数は北へ、二〇四偶数中隊と、五〇六中隊、残り半数は南へ出発の命令が出されました。

四、終戦

① 終戦の詔勅は、いつ、どういう状況の中で知つたか、その時の感慨、混乱の状況。

南へ向かつた私達偶数部隊は、敦京城の近く、一文字山に蛸壺を掘つて待機、二〇三日過ぎると、現地人や負傷軍人等も通らなくなったので南へ出発。鏡泊湖へたどり着き、他所の部隊より十五日の終戦を知らされてビックリでした(二十日頃)。

② 終戦により、軍はどうなつたか(現地解散、武装解除等)。

鏡泊湖で武装解除、三八式歩兵銃や短剣をソ連軍に渡しました。そして現地解散。

③ 軍から解放された後の行動。
九月初め、鏡泊湖から北へ向かつて出発、石

頭を通り、満州の北東部、ソ連との国境に近い
国民学校の校庭で待機生活をしていました。

④ 軍が解放しなかった場合、どのような拘束を
受け、その後どのように推移したか。

該当なし。

⑤ ソ連占領下における、ソ連軍や現地人の動静
はどうであったか、被害を受けたか。

よく分かりません。

五、シベリア抑留地への旅

① ソ連軍による武装解除の状況と、その後入ソ
までの生活状況（態）。

鏡泊湖で武装解除、兵器等をソ連軍に渡し、
入ソまでは、普通の生活でした。

② 東京ダモイと騙されて、上下二段の有蓋貨車
に積み込まれ、家畜並みの扱いで、長途シベリ
アに送られたその状況をできるだけ克明に（輸
送期間、貨車内生活、沿線の様子等）。

東京ダモイと信じ、喜んで貨車の中、寝たり
起きたり、景色などに見とれておりました。

③ いっ頃、どの地点からシベリアに送られ、シ
ベリアのどこに、いつ頃着いたか、抑留地の状
況はどうであったか。

二十年十一月下旬、満州の北東部、ソ連国境
近くの国民学校からシベリアのイズベストコー
ワヤ地区三〇八分所へ到着、召集兵が大勢おり
ました。

六、抑留地の生活

① シベリア内の抑留地を転々とした状況と、そ
の生活、他の抑留者の動静など。

三〇八收容所から 三二〇〜三〇七〜三〇
三〜二一九 二十二年八月、地区本部講習会
に出席で二十日間、二一〇收容所（本部長 東
京都出身 丸山三郎氏、講師 野沢 千葉県出
身、井上 新潟県出身、通訳 阿久津 広島県
出身、小使役 少年航空隊出身、本間哲男 函

館生まれ)。

二十二年九月、ハバロフスク講習会に派遣され一カ月、十月、地区本部二一〇收容所に戻ると講師団に編入され、赤大根になろう、外側は赤いが中は真っ白、日本に帰ったら身体を洗えば大丈夫を合言葉に。

ハバロフスクで外出した時、下駄で歩いている人を見かけたので、挨拶をして尋ねると、ノモンハン事件で捕虜になった由。当時は、捕虜などになった人が帰国すると、国賊として銃殺されるので帰れず、ソ連人と結婚して生活をしている由でした。

② シラミの発生と発疹チフス、衣服の消毒、入浴、身体検査などにまつわること。

終戦から下着も着たまま、シラミが発生し、毎晩ぬいでシラミ退治、壁にもシラミが沢山はっっておりました。

その後ドラム缶でお湯を沸かし、衣服の消毒、バケツに湯を汲んで身体も洗いました。

③ 何人ぐらい收容されていたか。

軍人、開拓団、女子挺身隊、満州人等約六十万、うち一割六万人が亡くなった由。各收容所には百人ぐらいが收容されていました。

七、労役

① どういう労役に就いたか。收容所と労役が一つにとどまらない場合は、それぞれについて、できるだけ詳しく。

シベリア鉄道の建設で、土盛り、枕木並べ、線路敷き。

ペチカ用燃料のため、森林伐採、薪割り等。

② 労役の時間、作業内容、仕事量(ノルマ)は、どうであったか。

時間は一日八時間程度、ノルマはありませんでした。

③ ノルマを達成しなかったとき、どういう処分を受けたか。また、達成したときはどういう恩恵を受けたか。

どちらもありませんでした。

- ④ ノルマを達成するための画策、手だてなどの工夫があったか。

ノルマを科せられた時は、今日はA君とB君を一〇〇%、その他の人を五〇〜六〇%、明日はC君とD君を一〇〇%、他の人を五〇〜六〇%と計画をしておりました。

- ⑤ 労役にまつわる悲喜こもごも別にありませんでした。

八、抑留者の統制管理

- ① 労役に就くか否か、どの労役に就くかは、どのように扱われていたか、基準はあったか、別にありませんでした。

② 労役に就くことを猶予または免除されてから、就労へ移る場合、どのように扱われていたか、基準はあったか。

ありません。

- ③ 労役に堪えられない者は、どのように扱われ

ていたか。

別にありませんでした。

- ④ 健康の管理は、常日頃どのように行われていたか。それは、健康を保つ上で、役に立ったか。

各人が健康に気を付けていました。

- ⑤ 朝夕点呼、作業場やその往復の監視の状況、異変はなかったか。

ロシア人は数字が苦手で、人員の点呼など日本人任せで、異変などありませんでした。

- ⑥ 着衣等衣服類について、どのように扱われていたか、特に厳寒越冬用はどうしたか。

昭和二十年の冬は夏服のまままで越冬、翌年からはソ連服を渡されました。

- ⑦ 食事類

食物の種類、一日に何回か、それぞれの量。

米飯、肉、魚、野菜はあったか、その頻度。

食物の不足分は、何によって補ったか、補食にまつわる種々相。

一日三回、各小隊で炊事に食糧を取りに行き、

バケツにご飯とお汁を頂き、室内で各班ごとに茶碗に入れて分配。

野菜はジャガ芋が主でした。食物不足の人は、外に出て松茸を取ったり、野原の木の实取り、タバコも餅草を干して新聞紙等にくるんで吸ったりしていました。

⑧ 休日は与えられていたか。

与えられていた場合、何日おきか、また、その休日はどのように過ごしたか（演劇、碁、将棋、麻雀、その他）。

休日は日曜日ごと。部屋で遊んだり、外出したり、二十二年三月には地区演芸大会が行われ、二地区イズベストコーワヤでは、青木光一さんが異国の丘を唄ってハバロフスク大会にも出場。私は二地区代表審査員に指名されて出席しました。

今日も暮れゆく 異国の丘に

友よつらから 切なかる

我慢だ待ってろ 嵐が過ぎりゃ

帰る日も来る 春が来る

⑨ 収容所の施設、構造はどのようなものであったか（採光、採暖、起居、動作、居住密度等）。

収容所は皆ロングハウス、長い丸太を積重ねて内外共に壁を塗り、石灰で白く染めていました。室内も真つ白で殺風景なので、窓と窓の間に絵画を依頼され、医務室から赤チンや黄色の粉薬、事務室より青い粉インク等を頂いて、水で溶き、当時の首相スターリンの肖像画や富士山を描いたり、腰の高さに二十センチ程間隔に二線を引き、その間にタンポポやブドウ等、連続模様を描き、大変喜ばれました。

⑩ 洗脳教育（民主化教育）は、どのように行われたか。特筆すべきことがあったか。

昭和二十二年八月、各収容所から一人ずつ集合、地区本部で二十日間、共産主義の講習会。終わると私はハバロフスク本部での講習会一カ月に派遣。戻ると地区本部の講師団に入れられ、故丸山団長（東京都出身）や故野沢講師（千葉

県)、福井通訳(広島県)、本間助手(函館市)等と共に生活。

赤大根は表面が赤く、中は真っ白、日本に帰国したら顔を洗えば元通りなので、赤大根(共産主義)を合い言葉に生活。何組かの講習生の中に同県人で間々田町の高橋莊吉氏もおり、現在も親交中です。

① 収容所生活全般について、収容者が自主管理することにより、労苦が軽減されたり、劣悪な事情が好転したことはないか。

ありません、普通の生活でした。

② 懲罰についての体験を、できるだけ詳細に別にありますでした。

九、拘留中の生活と極限状態における意識。

① 飢えと寒さと重労働を共通労苦とする中で、自己体験を通じ、それぞれの労苦がどのようなものであり、それをどうやって乗り越えたか、そういう状況の中で、自らを支えたものは何か。

収容所内の暖房用ペチカの燃料確保の為、森林伐採や運搬、薪作りに従事。森林伐採など初めてなので、左へ倒そうとノギリで切っていると、枝の関係で反対に倒れ、近くの人に当たったりしたこともありました。

薪切りはソ連側に多く見せかけるよう、井形に積んだりもしました。

② 生死の境、極言すれば死のふちに立たされた状況の中での、ある意味では単調な生活の繰り返し、生への強い執着をどのような意識で支え、持続させたか。

生死の境ほどには思っていませんでした。

③ 苛酷な抑留生活の中で、心身の活性化のため、何に心掛けたら工夫をしたか。

私は室内作業の為、普通の生活でした。

十、帰還

① いつ、どこで帰還の知らせを受けたか。

昭和二十三年十一月初旬、イズベストコーワ

ヤ地区の診療所に入院中、患者はタダ飯食いで
役立たずなので、全員帰還と伝えられました。

② 帰還集結地（ナホトカなど）までの道程。

イズベストコーワヤ診療所→コムソモリスク
→ハバロフスク→ナホトカ。

③ 帰還船乗船は、円滑であったか。

帰還船名は大郁丸、円滑でした。

④ 船内生活は、平穏であったか。
平穏でした。

⑤ 舞鶴港への上陸は、いつか。

昭和二十三年十一月二十七日でした。

十一、帰国後の生活

① 軍隊、抑留と空白を続け、出遅れた戦後社会
での生活基盤作りは、どうであったか。

二十四年一月の三学期から教職復帰と考えて
おりましたら、ソ連帰りが教壇に立つと児童生
徒が赤化されるからと復職は駄目で、元父親が
勤務していた日本専売公社の宇都宮地方局に二

十四年三月三日就職できました。

② 今日までの生活の節目節目で想起される悲喜
こもごも。生活は順調であったか、紆余曲折は
なかったか。

専売公社に三十三年間勤務、停年退職翌月か
ら年金も支給され、生活は順調です。今年八十
歳。